

地理学者がおこなう「真正な実践」の解明

—地理教師による教材研究のための地理学論文の読み解きに示唆するもの—

大坂 遊・岡橋 秀典・草原 和博

本研究は、専門科学者がおこなう「真正な実践」の解明に向けたシリーズ研究のうち、知識の社会領域の中でも地理学者の研究に注目し、「地理学者ならではの学びの過程とはどのようなものか」「その過程は、地理教師が教材研究のために地理学論文を読み解く上でどのように活かすことができるか」を解明することを目的とする。そのために、地理学論文の構成・構造分析と論文著者へのインタビューをもとに、地理学論文が執筆されるに至る経緯とその背景を分析する。本稿では、現代インドの地域研究の成果を発信した地理学論文「経済成長下のインドにおけるヒマラヤ山岳農村の変貌—ウッタラカンド州の事例—」(岡橋ほか, 2011)と、その筆頭著者である地理学者・岡橋秀典を研究対象とした。結果、論文が完成するまでの過程は「研究デザインの構築」「現地調査の準備と実行」「省察と意義付け」「地域像のフレームワークの精緻化」「執筆」という5段階から構成されること。論文執筆の過程にあるミクロな地理学者らしい学びとして、「フィールドと協力者に学ぶ」「データに学ぶ」姿勢があること。論文執筆の背後にあるマクロな地理学者らしい学びとして「他の研究者に学ぶ」「自らの経験に学ぶ」姿勢があること、が明らかとなった。最後にこれらの成果をふまえて、地理教師が教材研究のために地理学論文を読み解く上で重要な視点や方法として、「論文題目や章・節のタイトルに注目する」「解釈が生まれてくる根拠(エビデンス)とその集め方に注目する」「参考文献や註釈・特記事項に注目する」「論文の背後にあるコンテキストに注目する」の4点を提案した。

キーワード：地理学者，教材研究，真正な実践，他者との協働，経験にねざした学び

Elucidation of “Authentic Practice” of a Geographer: Implications for Reading Geographer's article for Teaching Material Studies by Geography Teachers

Yu Osaka, Hidenori Okahashi and Kazuhiro Kusahara

The current study focused on a research study conducted by a geographer, and aimed to understand “What are the aspects of learning process that are unique to geographers?” and “How can we apply the processes to a geography teacher’s reading of a geography research paper for the purpose of teaching material studies?” For that purpose, the current manuscript analyzed the processes and the background of writing of a geography research paper through an analysis of composition and construction of the paper, and conducted an interview with its author. The

focus of this investigation was “Transformation of Himalayan Mountain Village under India’s Rapid Economic Growth: Case Study of Uttarakhand State” (Okahashi et al., 2011) , a geography research paper that disseminated the regional research of modern India, and the research of its lead author Dr. Hidenori Okahashi. The analysis indicated that the processes of paper completion consisted of the following 5 stages; “constructing a research design,” “preparation and execution of field research,” “reflection and interpretation,” “refinement of the framework of regional image,” and “writing.” There were aspects of paper writing that were unique to a “micro” geographer, which included “learning from the field and collaborators” and “learning from data.” There also were aspects of paper writing that were unique to “macro” geographer, which included “learning from other researchers” and “learning from one’s own experience.” Based on these findings, we made 4 proposals as important viewpoints and methods in reading a geography paper as part of a teaching material study, which were, to “take note of the titles of the paper and its chapters,” “focus on the evidence that produced interpretation, and its collection method,” “take note of references, annotations, and special notes,” and to “pay attention to the context behind the paper.”

Key Words: Geographer, Teaching Material Studies, Authentic Practice, Collaboration with Others, Experience-based Learning

I. 問題の所在

本共同研究では、学問研究における研究過程と学びの過程に関して論文分析を通して研究をする。本稿では、知識の社会領域における地理学に関する論文を取り上げ、専門科学者の学びの過程(論文作成過程)を検討する。

本稿では、社会領域の中でも地理学者の研究に注目し以下の問いを明らかにする。①地理学者ならではの学びの過程とはどのようなものか。②地理学者ならではの学びの過程は、地理教師が教材研究のために地理学論文を読み解く上でどのように活かすことができるか。

これらの問いを検討するために、地理学者である岡橋秀典に研究協力を依頼し、分析対象として適切な論文の提供を依頼した。その上で、論文分析とインタビュー調査¹⁾をおこなった。

具体的な検討の手順は、以下の通りである。第1に、岡橋から提供を受けた論文の構成と構造を分析する。第2に、論文の分析と岡橋に対するインタビューを踏まえて、論文に隠されている地理学者の研究過程を確定する。なお、インタビュー内容は、岡橋の発言の趣旨を要約する形で掲載したり、発言を書き起こしたものの一部を鍵括弧で引用したりして提示する。第3に、確定した地理学者の研究過程を学習過程として再構成する。これらを踏まえて、地理教師による教材研究のための地理学論文の読み解きへの示唆を述べる。

本研究における論文やインタビューの分析は、主として大坂がおこなった。分析の結果は、岡橋の指摘を受けて修正した。論文の執筆に関しては、草原の指導を受けた。以後、本稿では大坂・草原を示す場合は「筆者」と表記し、岡橋を示す場合は「岡橋」あるいは「氏」と表記する。

II. 岡橋論文の構成と構造

1. 研究協力者と岡橋論文の紹介

研究協力者である岡橋は、人文地理学、な

かでも農村地理学を専門とする地理学者である。1975年に名古屋大学文学部を卒業後、同大学院文学研究科へ進学した。単位取得退学後は、九州大学文学部助手、新潟大学教養部講師を歴任。1985年に広島大学文学部に講師として着任後は、同助教授(1987年)、同教授(1997年)へ昇進し、現在は同大学院文学研究科教授(2001年～)を務めている。あわせて、同大学総合博物館長(2006年～)、同大学現代インド研究センター長(2010年～)も兼任している²⁾。岡橋は自身の専門領域について、農村地理学、経済地理学、現代インド研究の3つの領域から成り立っており、これらを並べると自身の問題関心がほぼカバーできるとしている。

本稿では、2011年に岡橋が筆頭著者となって執筆した共著論文「経済成長下のインドにおけるヒマラヤ山岳農村の変貌—ウッタラカンド州の事例—」を岡橋論文として取り上げる。岡橋論文は、地理科学学会の会誌『地理科学』の第69巻第1号に収録されており、岡橋自身が本稿で取り上げるにふさわしい地理学論文として選定したものである。氏によると、選定の理由は、近年現地調査を実施して、自身がその印象が鮮明であること。地誌的な内容を含んでいるので、地理教師が教材研究を行う対象論文として適切であること。インド研究の専門家である岡橋が、自身が解明した最新のインドの情報を提供したい、という意図があったためとしている。

2. 岡橋論文の構成

岡橋論文の構成は表1の通りである。各章の内容を要約し紹介する。

(1) 第I章「はじめに」

先行研究の到達点と残された課題、本研究の目的を示している。

先行研究の到達点として、1991年の経済自由化後のインド農村におけるマクロ・ミクロスケールの両面での先行研究を整理し、経済

表 1 対象論文の章構成（筆者作成）

I	はじめに
II	ウッタラカンド州の低開発性と開発問題
III	就業地域の拡大—農業の発展と農外雇用の進展 1) K村およびKT集落の概観 2) 就業構成の特徴 3) 野菜栽培と酪農の展開
IV	世帯経済の状況とその特徴 1) 世帯単位の所得の構成 2) 消費財の普及 3) 教育水準の向上
V	おわりに

自由化後の農村変動の把握においては、非農業就業機会の問題と、その拡大のメカニズムにおいて農地所有や世帯特性、個人の教育水準と関連づける視点が必要なことを導き出す。その上で、先行研究の課題として、これまでインド農村では低開発地域が持続する（貧しいままである）悪循環の構造が想定されてきたが、経済自由化以降は発展的様相を見せる地域も見られるため、今後の開発方策に資する意味でも、その変化の実態やメカニズムの解明が求められているとしている。

これらを踏まえた本研究の目的として、研究の射程を州レベルの特定の問題地域に限定するという留保をした上で、インド北部山岳地域のウッタラカンド州を対象に、低開発地域にありながら発展的様相を呈する農村を取り上げ、経済成長下のその変化の実態を、おもに就業面から解明することが掲げられている。

（2）第Ⅱ章「ウッタラカンド州の低開発性と開発問題」

分析対象とする地域の存在するインド北部のウッタラカンド州について、地形や産業、歴史的経緯や近隣地域との関連といった地誌的視点から概観している。ウッタラカンド州

は山岳地域であり農業主体の経済であること。政治的経緯から隣の大規模州から独立するも、経済的には従属している「マネーオーダー・エコノミー（送金経済）」であること。独立後は中央政府の支援などによる積極的な開発政策によって農村部まで経済的影響が及んでいることを確認している。

（3）第Ⅲ章「就業地域の拡大—農業の発展と農外雇用の進展」

対象地域であるK村およびその中心集落であるKT集落について、各種統計の分析と地域住民への聞き取り調査によって、就業面を中心とした経済の実態を分析している。

まず地域全体の概観として、当該地域はウッタラカンド州東部にある中心都市ナイニータール近郊に位置する山岳地帯であることを確認する。その上で、根拠となるデータを出典として示しながら、対象地域であるK村およびKT集落は、農業・観光業ともに近隣都市との結びつきが強いこと。集約的な野菜栽培と酪農の展開が重要な現金収入源となっていること。高額所得者層の中心をなす公務員などの就業機会が豊富で、かつ多様化している地域であることを示している。なお、ここで用いられているデータのほとんどは、岡橋が実際に現地に赴いて聞き取り調査を実施し、収集したものが用いられている。

（4）第Ⅳ章「世帯経済の状況とその特徴」

対象地域において、世帯単位の就業による所得状況や世帯経済への貢献度、経済面での世帯間の格差を解明するために、対象地域の世帯をインドにおける全国的な分類基準をもとに4つの所得階層に区分し、世帯単位の所得階層と収入源、農地所有分布、高額給与所得者数、消費財の普及、年齢階層ごとの教育水準別人口の6つの観点から相関関係を考察している。

対象地域であるK村およびKT集落では、収入源が多様化している世帯はあくまでも上位階層であること。農外雇用による高額給与

者が上位階層に偏っていることから所得階層間の格差が大きいこと。消費財購入状況からは所得階層間の生活スタイルの分化が見られること。年齢階層にかかわらずおしなべて教育水準（学歴）が高い男性に比べ、女性の教育水準は全体として低いこと。一方で、20代では男女ともに急速な高学歴化が進行していることを示している。また、教育水準が向上した要因には、観光産業や教育機会が充実している近隣都市へのアクセスの容易さ、出稼ぎ労働のための学歴の必要性、世帯所得の向上にともなう人的教育投資の向上、上位カーストに偏った村自体の特性という4つがあることを推測している。

（5）第V章「おわりに」

本論文の成果と留保条件、今後の課題を示している。

まず本論文の成果として、第I章で述べた本論の目的と方法を再度提示した上で、第III・IV章で検討を行ったそれぞれの視点からの考察の結果を改めて概括している。その結果をふまえて、経済成長下のインド農村の発展にとっては、農外雇用の拡大、商業的農業の発展、教育水準の向上が鍵となることを示唆している。一方で、当該地域は近隣都市ナイン

ータールの経済的な恩恵を大いに受けたものであり、成長する地方都市の波及効果に浴して発展している農村の事例と見ることもできる、という点を留保している。

最後に今後の課題として、州内の急速な地域分化の進行を把握するために、村レベルの統計データの分析を行うとともに、地方都市の成長・農外労働市場・商業的農業の展開と地域への影響などの基本的な課題を実証的に追求していくこと。隣州との比較を通して開発問題と州の政策対応との関係を考えること。開発が文化的な面について与えた影響について検討する必要があることなどを提示している。

（6）その他の項目

参考文献には、インド地域研究に関わる国内外の先行研究論文や書籍、インドのセンサス(国勢調査)の報告書などが示されている。また、本文末尾には、岡橋論文が科学研究費助成事業の成果の一部として執筆されたことや、調査協力者への謝辞、骨子を学会で既に発表したことといった、執筆にまつわる諸事情が記されている。

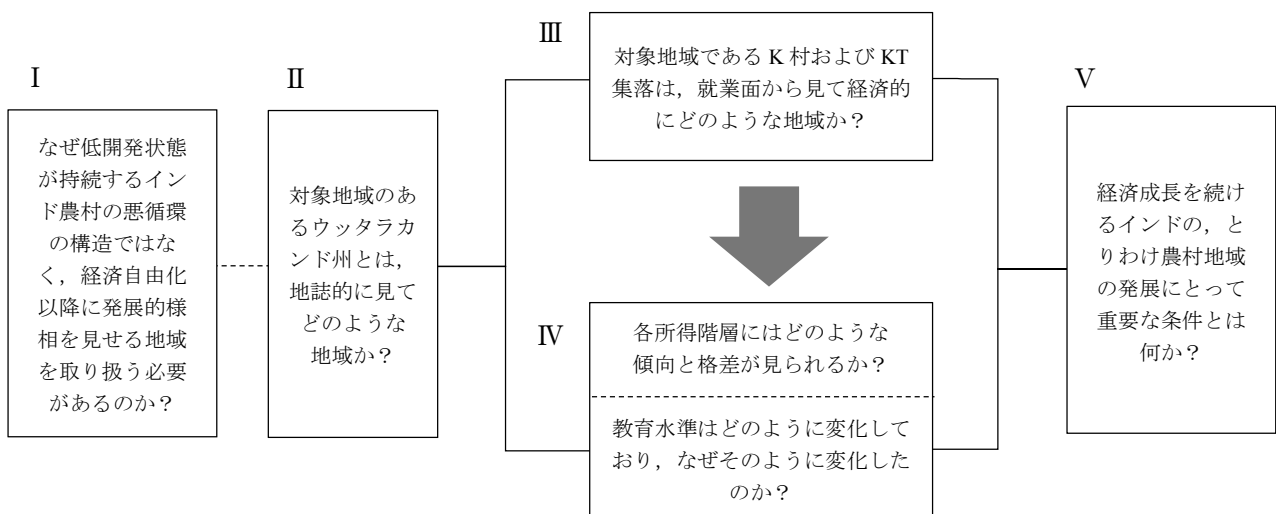


図1 岡橋論文の問いの構造（筆者作成）

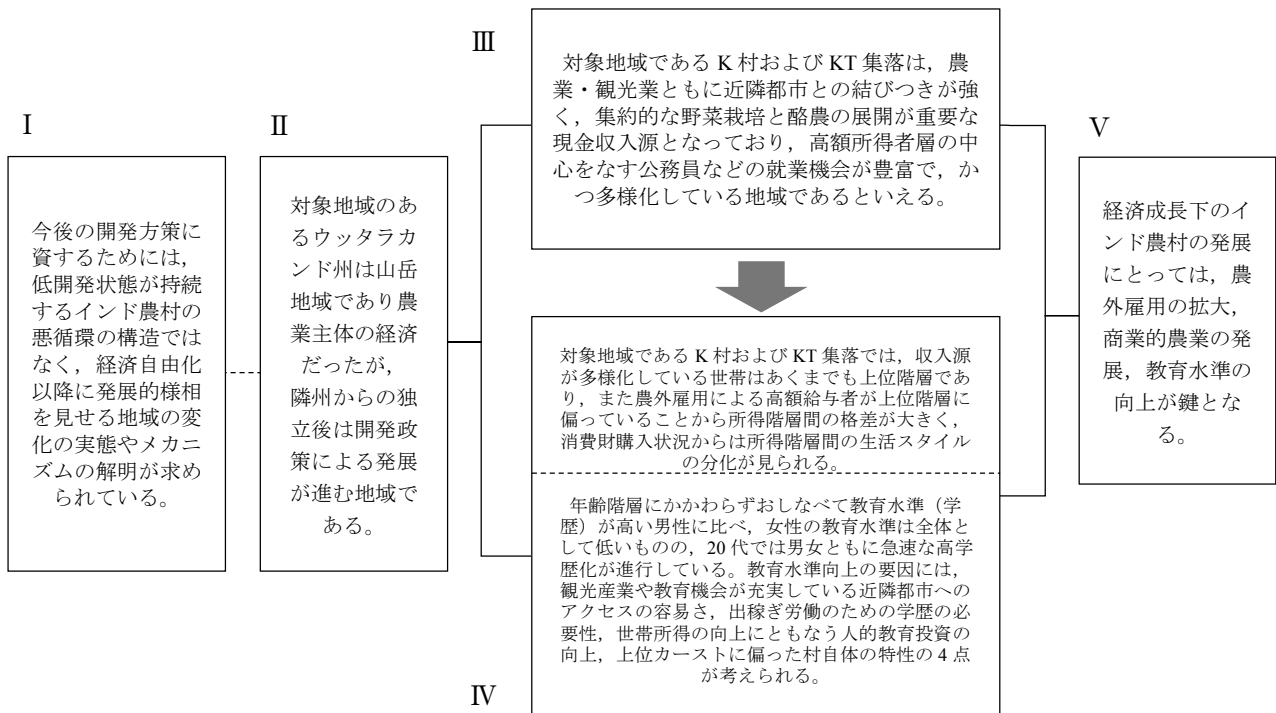


図2 岡橋論文の内容の構造（筆者作成）

3. 岡橋論文の構造

(1) 中心的な問い

論文の問いと内容の構造を整理すると図1および図2のように示すことができる。岡橋論文の中心的な問い（リサーチ・クエスション；以下 RQ と略記）は、「経済成長を続けるインドの、とりわけ農村地域の発展にとって重要な条件とは何か？」だと推定される。論文中ではこの RQ は明示されていないものの、この問いに対する結論（リサーチ・アンサー；以下 RA と略記）は、最後の第V章で提示されている。岡橋論文は、直接的にはこの RQ に答えることが目的とされており、その他の章はそれを実証する過程として組織されているとみなすことができる。

(2) 第I章の位置づけ

ただし、この RQ を実際に実証しているのは、第II章から第IV章までの3つの章である。残る第I章は、経済自由化以降に発展の様相を見せる地域の、変化の実態を説明するという、本研究の目的と意義を説明するものとな

っており、第II章以降の一連の問いと内容の構造からは一定の距離間が生じている。その要因は、岡橋自身が岡橋論文第I章で記述しているように、このミクروسケール研究そのものは、州レベルの特定の地域の実態を解明することに留まっているため、インドのマクروسケールの問題に直接的に接合するものとなっていないためであると推測できる。

(3) 第II章から第IV章の関係性

RA を実証する直接的な過程である第II章から第IV章の中には合計4つの問いを見出すことができるが、これらの問いは並列ではなく、大きくは第II章の1つと、第III章・第IV章の3つに分けることができる。

第II章は、実際に調査の対象とした K 村および KT 集落の置かれている地誌的状况を把握するために設定された章である。ウッタラカンド州は山岳地域で農業を主体としており、経済的にも隣州に從属する「マネーオーダー・エコノミー（送金経済）」である、という州の地誌的理解を踏まえて、対象地域のミクロス

ケール研究へと繋げている。

一方の第Ⅲ章と第Ⅳ章は、地域の実地調査によって得た同じデータをもとに考察している点では共通している。しかし、第Ⅲ章が村落・集落全体での経済・就業状況の傾向や特質をとらえようとする、よりマクロなスケールでの分析なのに対して、第Ⅳ章は世帯単位、社会階層レベルでの経済状況や教育水準を分析した、よりミクロなスケールでの分析となっている点で、両者は好対象となっている。さらに、第Ⅲ章ではデータから読み取り可能な結果のみを示しており、比較的客観的な記述に終始しているのに対し、第Ⅳ章では教育水準向上の結果だけでなく、その要因を推測にもとづく考察を盛り込むなど、より踏み込んだ記述がなされている。

(4) 小括と意義

以上のように、岡橋論文は、インド地域研究の方向性と意義を提示するとともに、州レベルにおける事例を提示するという留保条件を示す第Ⅰ章。対象地域を取り巻く州の地誌的状况を概観する第Ⅱ章。対象地域に対するマクロで客観的な分析に留める第Ⅲ章と、ミクロで示唆的な考察に踏み込んだ第Ⅳ章。事例をもとに RQ に対する部分的な RA を提示する第Ⅴ章という構造になっていることが明らかとなった。このように、岡橋論文では RQ を読者に推測させ、RA のみを提示するという手法が採用されている。この理由については、続く本稿第Ⅲ章で考察する。

岡橋論文は、これまで先行研究が見逃してきた「低開発地域が悪循環問題から絶たれ発展の様相が出現してきた理由」を、統計分析などのマクロな手法と、特定地域住民を対象とした悉皆調査（聞き取り調査）というミクロな手法を組み合わせることで、実証的に解明した点に意義があると言える。とりわけ、既存の資料や刊行物等から得られる情報だけでは解明することが難しい地域の実態を、実際に現地に赴き、フィールドワークの手法を

駆使して岡橋自身が「生の」データを収集して解明している点が、地理学の論文としての特質と言えるのではないか。

Ⅲ. 岡橋論文の作成過程—論文執筆過程にみる地理学者らしい学び—

1. 作成過程の全体像

上述の岡橋論文の構造の分析と、この結果をもとにした岡橋へのインタビューをふまえて、岡橋論文が執筆されるまでの過程を筆者が再構成したのが表 2 である。

作成過程は、大きくは「1. 研究デザインの構築」「2. 実地調査の準備と実行」「3. データの省察と意義付け」「4. 地域像のフレームワークの精緻化」「5. 執筆」という 5 つの大きな段階から構成されている。さらに、「2. 実地調査の準備と実行」から「4. 主張の精緻化」の各段階は、それぞれ 2 つの小さな段階に細分化することができる。ここでは、5 つの大きな段階それぞれの内実を、論文とインタビューの内容をもとに明らかにしていく。

2. 「研究デザインの構築」段階

論文執筆に至るまでの一連の研究計画を構想する段階である。ここでは、インドの実証的な地域研究を行う上で、先行研究の成果と課題を整理する。また、自身のこれまでのインドにおけるフィールドワークにもとづく経験から、研究の RQ を構想する。岡橋論文の第Ⅰ章の基礎となる段階である。

岡橋はこれまでの研究から、インドの経済自由化以降、デリーを始めとする大都市圏の郊外が、都市中心部の成長の影響を受けて急速に変化・発展していくことは把握していた。しかし、ウッタラカンド州の地域調査を行うことになった際、「はたして経済成長の中で、この（K 村のように、大都市圏から）遠く離れたところはどのようなふうな影響を受けているのか」という疑問を抱いたという。この疑問

表 2 岡橋論文の執筆過程（筆者作成）

論文作成の段階		各段階で検討された内容
1. 「研究デザインの構築」段階		<ul style="list-style-type: none"> ・ 先行研究の成果と課題 ・ 暫定的な仮説の構想, RQ の設定
2. 「実地調査の準備と実行」段階		
	2-1. 地域と方法の確定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現地協力者の決定と連携体制の構築 ・ 調査候補地の選定 ・ 候補地の現地視察と調査地の確定 ・ 研究方法の確定と調査票の作成
	2-2. 調査の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査のグループ・ペア分け ・ 現地スタッフとの調整 ・ 聞き取り調査の実施 ・ 収集したデータの共有と意見交換
3. 「省察と意義付け」段階		
	3-1. 仮説の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・ RQ の確定
	3-2. 地域像のフレームワークの確定	<ul style="list-style-type: none"> ・ RA の確定
4. 「地域像のフレームワークの精緻化」段階		
	4-1. 論文構成の構想	<ul style="list-style-type: none"> ・ データの選択と配列
	4-2. 地域像のフレームワークの吟味	<ul style="list-style-type: none"> ・ 論文の「ひな形」の作成 ・ 学会発表等による論の精緻化
5. 「執筆」段階		<ul style="list-style-type: none"> ・ 掲載する／しないデータの選別 ・ 記述する／しない方法論の検討

を契機として、岡橋は本研究における暫定的な RQ を設定したと想定できる。氏はこの問いに答えるために、「農村を世帯レベルで見たい」「この地方の平均的な村を調査したい」という目的をあらかじめ持っていたという。ただし、ここでの RQ はあくまでも“仮説めいたもの”にすぎない、という点に留意する必要がある。

3. 「実地調査の準備と実行」段階

論文執筆に向けた重要な局面であるデータを収集するための現地調査を計画し、実際に実行する段階である。細かくは、「地域と方法の確定」と「調査の実施」に分けることができる。

(1) 「地域と方法の確定」

実際にどのような地域を、どのような方法で調査するのかを確定する。本稿第IV章で詳

述するが、岡橋は広島大学を始めとするインド研究プロジェクトに深く携わっており、他のメンバーとの分担の中で、自身の専門とする農村地理学の知見を活かし、ウッタラカンド州の農山村地域を対象とした調査を担当することが前提条件となっていた。そこで氏は、岡橋論文の共著者でもある現地クマオーン大学の地理学者チャンド氏に協力を仰ぎ、調査対象にふさわしい地域を選定した³⁾。

岡橋は、あらかじめ調査対象地域を指定することはせず、「1. 研究デザインの構築」段階で想定していた大まかな研究構想を伝え、チャンド氏とのやりとりの中で具体的な候補となる村を選定してもらおうという方法をとった。その後、実際に現地を訪れて候補となる農村の状況を視察した上で、改めて最終的な調査対象地域として K 村および KT 集落を選定した。氏によると、必ずしもナイニーター

ル近郊にあるこの村を対象とする必要はなかったが、研究の場合は理屈だけでなく、村との関係という点も考慮に入れなければならない。「受け入れてもらえるところ」という条件が重要であったという。

地域を確定させる作業と並行して、調査の方法・手続きを確定させなければならない。岡橋は本研究において、調査票を用いた悉皆調査というアプローチを採用している。その理由として、氏は広島大学の長年のインド地域調査の成果をふまえて蓄積されたフィールドワークの方法論が活用できることを挙げている⁴⁾。この方法論については、氏は原則として自身の研究目的に応じて確定したもので、チャンド氏ら現地の協力者の意見は参考にする程度に留めたという。

(2) 「調査の実施」

これらの準備を経た上で、実際に現地に赴いて調査を行う。岡橋は、共著者である他の3名と自身をそれぞれリーダーとする4つのグループを編成し、各グループにペアとなる現地スタッフ1名を加えた体制で、KT集落に対する悉皆調査を実施した。

調査は調査票に従って聞き取りを行った。基本的には、現地スタッフがヒンディー語で調査票をもとに聞き取りをし、日本人スタッフは現地スタッフと英語でやりとりをする。調査中に疑問点があれば、適宜現地スタッフを介して追加で村人とやりとりする、という方法がとられた。調査後は、現地スタッフや日本人スタッフとともに内容の妥当性を吟味した。

4. 「省察と意義付け」段階

現地調査で収集したデータをふまえ、論文執筆に向けたRQとRAを確定する。細かくは、「仮説の修正」と「地域像のフレームワークの確定」に分けることができる。

(1) 「仮説の構築」

岡橋は、研究を進めるにあたって、この村

を取り上げる上では理論や仮説は先行していないという。むしろ、氏は現地調査を通して「村に語らせる」ことによって、その中から仮説が導かれるという考えを有していた。しかし、そのような態度で現地調査に臨んだ氏にとっても、ここまで対象地域の農外就業が進み、かつ教育水準が向上していることは想定外だったという。

このような発言から、氏は事前に抱いていた漠然とした仮説を、現地調査を通して吟味し、より洗練された確定的なものに構築するという、帰納的なアプローチをとっていることが伺える。この省察のプロセスを通して、氏は論文執筆におけるRQを確定したと推測できる。

(2) 「地域像のフレームワークの確定」

岡橋はインタビューの中で、地域をとらえる視点について言及している。地域というのは「多面体」であり、「どこに光を当てるか」、つまり地域の特徴をどうとらえるかというのは、調査主体である地理学者に依存している。氏によれば、論文では「もっと広く、この村の就業とか産業とか」を取り上げて論じるやり方もあったという。だが、現地調査によって得られたデータと、感覚をもとにした省察を経て、対象地域の発展における重要な鍵となる要因が、「所得階層」と「教育水準」にあることを確信し、ここに焦点を当てて論を構成しようと考えたという。

そもそも岡橋は、自身のインド研究においては、「低開発地域の悪循環の構造」を取り上げるのではなく、むしろ「発展的様相を意図的にアピールする必要がある」と感じていたという。氏は、かつての地理教科書では、人口問題や貧困といった暗い側面にばかり注目した記述がなされていたことを挙げ、「発展するインド像」を提示したいという意図があることが述べられている。

このように、従来からの氏の考えと調査をふまえた経験によって、地域像のフレームワ

ーク、すなわち論文の RA が確定されたと判断できる。

5. 「地域像のフレームワークの精緻化」段階

確定した RQ と RA をもとに、「どのように地域を伝えるか」というロジックを精緻化していく段階である。細かくは「論文構成の構想」と「地域像のフレームワークの吟味」に分けることができる。

「論文構成の構想」は、焦点化されたテーマにもとづき、「どのように地域を伝えるか」を具体的に実現するために必要な段階である。この段階で、既に岡橋論文にほぼ類似した論文構成が構想されていると想定される。収集した膨大なデータから、どの内容を、どのように配列するかという点や、どのような手順で RA を導くかというロジックが詳細に検討されたと推測される。

「地域像のフレームワークの吟味」は、論文としての「ひな形」を完成させ、さらなる精緻化を図る段階である。インタビューでは語られていないものの、岡橋論文の末尾には、地域調査の成果を事前に学会や研究交流などの場で発表したことが明記されている。岡橋は、論文の骨子を他の研究者に公表し、意見を求めることで、地域を解釈する枠組み・フレームワークを洗練させていったと判断できる。

6. 「執筆」段階

ここまでの過程を経て、ようやく本格的な執筆作業が開始される。岡橋論文の場合は、論文の執筆はほぼ岡橋が担当したという。また、インタビューの中では、やむを得ず基礎的なデータの多くを削除したり、現地調査の方法論に関わる記述を一切排除したりといった、査読を通すためのテクニカルな面での苦労話が語られた。こうした手続きを経て、学術論文としての完全な体裁が整えられていったのである。

7. 小括

以上をふまえると、岡橋論文という一つの論文を執筆する過程そのものに内在する「地理学者らしい学び」は、次の2点にまとめることができる。

第1に、理論や結論ありきではなく、状況を踏まえたフィールド設定と仮説修正が行われる点である。岡橋は、もともと自身が積み重ねてきたインド地域研究の成果にもとづく緩やかな仮説こそ有しているものの、早急にその正当性を立証できそうな地域や方法論を決定することは慎む。現地協力者との信頼関係にもとづき、状況に応じたフィールドを設定するとともに、仮説に反する事実と直面した際は、冷静に仮説を吟味し、修正する柔軟さも持ち合わせている。「フィールドと協力者に学ぶ」姿勢こそが、地理学者らしい学びを規定しているのである。

第2に、実際に現地へ行って調査する、というフィールドワークの手法の重要性が強調されている点である。「村に語らせる」という氏の言葉に象徴されるように、既存の資料や刊行物等ではつかめない生のデータを丹念に収集し、その土地や人間との交流を通して地域の実態を把握することが、論文を執筆する上での極めて重要な手続きとなっている。「データに学ぶ」姿勢こそが、地理学者らしい学びを規定しているのである。

IV. 岡橋論文の背景－論文執筆の背後にある地理学者らしい学び－

1. 研究者共同体としてのコンテクスト

本稿第Ⅲ章において、岡橋論文は、著者である岡橋自身が有する「伝えたい地域像」を描き出すために執筆されていることが明らかとなった。それでは岡橋は、「伝えたい地域像」を確定する視点をどのようにして身につけたのだろうか。ここでは、岡橋自身の研究史を紐解きながら、論文が執筆されるに至る経緯

と背景を明らかにする。

(1) タテのプロジェクト：研究室としての継続研究における位置づけ

そのためには、まず、岡橋が所属する広島大学文学研究科地理学研究室（以下、当該研究室）の状況を確認する必要がある。岡橋（2007）をもとに、当該研究室のインド地域研究史を整理したのが表3である。

当該研究室は1960年代から、科学研究費助成事業の支援を受けながら、継続的にインド地域研究を推進してきた経緯がある。調査地域はインド全土に広がり、時期ごとのプロジェクトの研究テーマも異なる課題が掲げられている。しかし、岡橋によれば、そこには大きな研究の流れと調査手法の共通性があると

いう⁵⁾。本稿で分析する岡橋論文も例外ではなく、表中第VII期の「国内周辺部問題プロジェクト」の一環として実施された調査の成果物である。岡橋は、もともこのプロジェクトの統括責任者として、山岳地域を事例とした調査・研究をすることがあらかじめ確定していた。

(2) ヨコのプロジェクト：大学・研究機関の連携による地域研究における位置づけ

加えて、岡橋は現在、当該研究室を越えたより広範な領域の大学や研究機関の研究者とともにインド研究を推進する「現代インド地域研究 (INDAS)」に参加し、広島大学側の拠点である「広島大学現代インド研究センター (HINDAS)」の長も務めている (図3)。

表3 広島大学地理学研究室のインド地域研究史の変遷（岡橋（2007）より引用，一部改変）

時期	研究課題名 (第III期以降は対応する科学研究費助成事業の名称)	プロジェクト名
第I期	①ウッタルプラデーシュ州・西ベンガル州 ②ウッタルプラデーシュ州・西ベンガル州 ③パンジャブ州・ハリヤーナー州・ヒマーチャルプラデーシュ州	インド集落の変貌プロジェクト
第II期	①「南インドにおける緑の革命と地域変化」 ②「干ばつ常習地域の農業開発と地域変化」 ③「多雨地域における農業開発と地域変化」	農業開発と地域変化プロジェクト
第III期	(1986～91年)「インド・干ばつ常習地域の農業と村落変化」 ※同名の科学研究費助成事業が4種類存在	干ばつ常習地域プロジェクト
第IV期	国際学術研究(1991～1993年)「インドの社会経済開発における人的資質に関する地理学的研究」	人的資質開発プロジェクト
第V期	国際学術研究(大学間協力研究)(1996年)「インドにおける工業化の新展開と地域構造の変容」	工業化の新展開プロジェクト
第VI期	基盤研究(A)(2001年)「経済自由化後のインドにおける都市・産業開発の進展と地域的波及構造」	都市・産業開発プロジェクト
第VII期	①基盤研究(A)(2005年)「グローバリゼーション下のインドにおける国土空間構造の変動と国内周辺部問題」 ②基盤研究(B)(海外学術調査)(2008年)「インド・国内周辺部における開発戦略の展開と持続的発展への課題—2つの山岳州の比較」	国内周辺部問題プロジェクト
第VIII期	基盤研究(A)(海外学術調査)(2011年)「現代インドにおけるメガ・リージョンの形成・発展と経済社会変動に関する研究」	メガ・リージョンと経済社会変動プロジェクト

※第II期以前の研究課題名は科学研究費助成事業データベースに記載されていないため、岡橋（2007）に依存する。また、第VIII期の時期区分とプロジェクト名は筆者による。

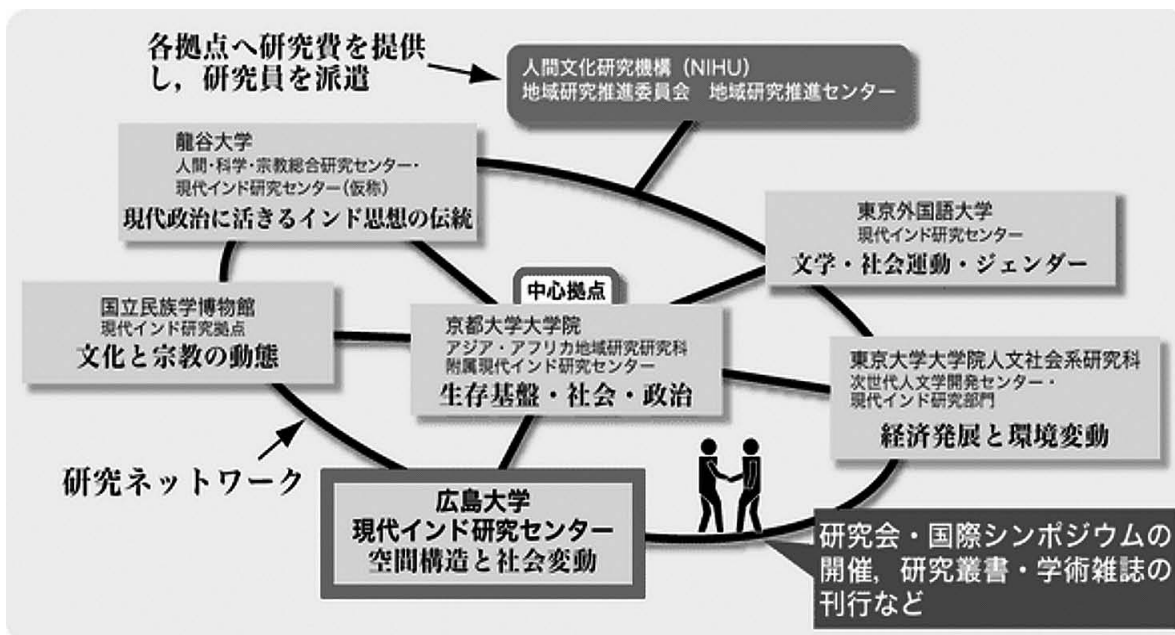


図3 現代インド地域研究の全体像と広島大学現代インド研究センターの位置づけ (HINDASのウェブサイト⁶⁾より引用)

岡橋によると、このセンターの研究の一環として、その一連の成果をまとめたのが、自身が編集・執筆に携わった近著『現代インドにおける地方の発展』であるという。本書の前書きには「国内周辺部問題プロジェクト」と同様の科学研究費助成事業の支援を受けたことが明記されていることから、岡橋は両プロジェクトのリーダーとして、2つのプロジェクトを有機的に連動する形でインドの地域調査を推進してきたと判断できる。

このように、「タテ：ロングスパンでの、ローカルな継続研究プロジェクト」と、「ヨコ：ショートスパンでの、ナショナルな地域研究プロジェクト」という、2つのコンテキストが交差する状況で、氏は自身の判断により、「低開発地域にありながら発展的様相を見せる農村」を具体的な調査対象地域として選択することとなったのである。

2. 研究者個人としての問題意識

(1) 地域をとらえる視点

一方で、岡橋が個人の経歴の中で形成して

きた問題意識も、論文執筆に強い影響を与えていることも見逃せない事実である。

岡橋はインタビューで、自身の地域をとらえる具体的な視点を、「ビューポイント」あるいは「パースペクティブ」という言葉で表現している。氏は、農村という存在は、自身が従来専門としてきた経済的な視点だけで解き明かすことはできず、社会的・文化的な側面からも見ていく必要があると感じているという。これは、インド地域研究をやる中で、狭い自分の研究だけでは、社会的意義を見出すことが難しく、「インドの経済とか、インドの社会とかっていう。広いスペース…いわゆるインド地誌的な、包含するような領域をやっぱり自分に課すしかない」と考えるようになったためだという。

(2) 「場所」や「人」との出会い

インタビューでは、岡橋が前述のような「ビューポイント」を抱くに至るまでに、自身の研究者としての来歴の中で、当人が想像していなかった、多くのフィールドや研究者との出会いがあったことが語られた。

もともと岡橋は、博士論文研究以降現在に至るまで、「農村地域を経済的な視点から見る」という氏の言葉通り、一貫して日本国内の農山村地域を対象に経済地理学の方法論を用いた研究を行ってきた。広島大学着任以前は、九州や北陸の先駆的な地域振興の事例に出会ったり、気候・風土の違いによる地域性の差を身をもって体験したりする等、職場を動くことによる多くの学びがあったという。

広島大学着任後は、前述のように、当該研究室のインド地誌研究プロジェクトに自動的に組み込まれる形となり、「よくわからないんだけどやるしかない」状況で、実際の調査の現場でフィールドワークの手法を先輩研究者から学んでいったという。その中で、「一つの村を一生懸命（やったところで、インドのことが）（中略）わかるのか」「地理学者としては、もっと広い範囲も見てみたい」という問題意識が芽生えた。その後、インドの経済自由化による急速な工業化と、それに対応したインド研究プロジェクトの進展にともない、自身の研究のキーワードを「工業化」に定める。そして、工業化の進展する中での農山村地域の変貌や、「マルチスケールで地域を見ていく」という「ビューポイント」の形成に至ったという。

他にも、同じ研究室内の複数の研究者による協同での学会事務局の運営、研究室を越えた学会やプロジェクトでの、専門家集団との学際的なコラボレーションなどの機会が、岡橋の現在の問題意識を形成していることが語られた。

（3）後継者の育成

さらに岡橋は、インタビューの中で折に触れて、フィールドワークを含めた海外研究における困難さを語っていた。氏によれば、海外研究はフィールドに入ってもすぐにはものにならず、「だいたいまあ5年くらい無駄にする」。だが、地理学者にはこの「偉大な無駄」が重要であり、駆け出しの大学院生はとて

論文を書けるような状態ではない（だから執筆は主として自身が担当した）という。このような発言からは、岡橋論文の共著者であり、当時の教え子でもあった当該研究室の大学院生に対して、フィールドワークを通して地域研究の手法を学び、インド研究の後継者として育ててほしいという、氏の思惑が確認できる。

3. 小括

以上をふまえると、岡橋論文という一つの論文の背後にある「地理学者らしい学び」は、次の2点にまとめることができる。

第1に、研究者共同体という大きな枠組みの中で、相互に吟味しあうことで、自身の研究を意義づけ、発展させている点である。地理学者はたいてい、地理学者同士、あるいは他の領域の研究者も交えた総合的な研究プロジェクトの一部としての研究を行う。そのため、その場合はフィールドや研究方法のある程度の限定化・焦点化は避けられない。必ずしも本人の問題意識と直接的に合致しないテーマの研究も引き受けざるをえない。一方でその制約が、研究者共同体の中で自身の問題意識やパースペクティブを洗練させることにも結びついている。「他の研究者に学ぶ」姿勢こそが、地理学者らしい学びを規定しているのである。

第2に、そのような状況でも、地理学者は研究の中に個人の問題意識を反映させ、それにもとづく「見方」を織り込んでいる点である。共同研究では、大まかなフィールド自体は他者によって決められていても、具体的な地域の選定の規準や地域解釈の枠組みは個々の研究者に委ねられることが往々にしてある。そこで地理学者は、自身の専門性に裏打ちされた視点と方法論にもとづく「伝えたい地域像」を、論文を通して間接的に示唆していく。「自らの経験に学ぶ」姿勢こそが、地理学者らしい学びを規定しているのである。

これらの点は、どちらかといえば、工学や医学などの自然科学の研究者のアプローチに近い。このような側面が、個人単位での研究が前提であり、学説の中で自身の研究を位置づけ・意義づけなければならない、歴史学をはじめとする他の人文・社会諸科学の研究者とは異なる、地理学者独自の学びの過程を規定しているといえるだろう。

V. 終結—「背景」と「状況」をふまえた地理学論文を読み解く視点の重要性—

地理学論文に馴染みのない人間は、時として、次のような「常識」を抱いて地理学論文を読んではいないだろうか。それは、「地域研究・地域調査論文は、地理学者が興味のある場所を、好きなように調査しているのだろう」

「地域研究・地域調査論文は、実証的なデータにもとづいて、客観的で網羅的な地域理解が目指されているのだろう」という類のものである。岡橋論文の「背景：論文執筆の過程とそこで捨象されたもの」と「状況：論文執筆をとりまく研究者（共同体）のコンテキスト」を分析する中で、そのような「常識」こそ地理学論文の「誤読」の要因となる恐れがあることが、本稿で明らかとなった。

では、地理教師が教材研究のために地理学論文を読み解く上で、このような「誤読」から抜け出すためには、どのような視点や方法が求められるだろうか。筆者は本稿をふまえて、次の4点を提案したい。

①論文題目や章・節のタイトルに注目する。「このような視点から地域をとらえようとしている」という、著者の問題意識・パースペクティブを的確に読み解いていく。例えば、「〇〇の状況」「〇〇の傾向」という表記は、「地域の特徴を〇〇からとらえた」へと置き換えてみる。他にも、「〇〇の進展」「〇〇の向上」などという表記がある箇所は、著者がより積極的に地域を特徴づけ、価値づけようとする記述であると解釈する。

②解釈が生まれてくる根拠（エビデンス）とその集め方に注目する。「どのような根拠にもとづいて結論を出しているのか」という、著者の論の展開の仕方を読み解いていく。図や表などに加工されたものとして、あるいはインタビュー記録などの生データとして論文内の随所に明示されているデータを、残さずスクラップし、それぞれのデータの間関係を推測する。

③参考文献や註釈・特記事項に注目する。「どのような経緯を経てこの論文が書かれたのか」という、著者の論文執筆までの学びの過程と、成果のアウトプットの仕方を読み解いていく。先行研究として参考文献から導き出そうとしている成果や課題、著者が研究に取り組んだ際の状況や協力者の存在、この論文以外に研究成果を公表した機会などを、本文の外に書かれていることから整理する。

④論文の背後にあるコンテキストに注目する。「どういう研究室の、どういうプロジェクトの中で行われた研究なのか」という、論文をとりまく一連の研究の、研究史における位置づけを読み解いていく。著者の所属する研究室の来歴や、著者が関わる学会やプロジェクトの概要など、論文には書かれていない情報を、インターネットの研究者データベースなどを活用して把握する。可能であれば、著者が過去に執筆した論文や書籍を取り寄せ、普段からどのような研究テーマや領域に関心を持っているか確認する。

地理学者の真正な学習の過程を子どもの学習の過程に置き換えるためには、教師が地理学者の学びに学び、それを教師が学習者である子どもの学びへと変換する作業をしていくという、二段階の変換作業が求められる。本稿では、その第一段階を第二段階へと置き換える過程、すなわち、真正な実践をしている地理学者の学びの過程を教師がいかにかに学べばよいかを考察し、地理教師が地理学者の教材研究をする上での「読み解きの作法」の一端

を明らかにした。

本稿はシリーズ研究の一つの事例として、地理学、中でも地誌学における地域研究を専門とする地理学者の学びの過程の一端を明らかにした。同じ地理学でも、地誌学の別の研究者、あるいは系統地理学や自然地理学などの人文地理系ではない地理学者の場合は、また今回とは違う学びの過程が存在していることが想定される。今後はそれを発掘していき、他分野・他学問との比較の中で本研究の成果を位置づけていくことが必要になってくるであろう。

註

- 1) 研究協力者である岡橋へのインタビューは、筆者の大坂が、2014年10月16日に、広島大学教育学研究科 K313 号室で実施した。事前に岡橋に対象論文の構成・構造分析の結果（本稿第Ⅱ章第2節・第3節の内容）を送付した上で、「対象論文の構成・構造分析結果の妥当性」「対象論文の選定規準」「対象論文の研究テーマや方法論」「対象論文の研究成果のまとめ方」「研究者自身の来歴と問題意識」の5点を聞き取った。聞き取り時間は約90分だった。
- 2) 岡橋の経歴については、広島大学のウェブサイトや研究者データベースの情報を参照した。主な参照 URL は次の通り。「大学院文学研究科・文学部>教員紹介>教員紹介—岡橋 秀典」http://www.hiroshima-u.ac.jp/bungaku/staff/p_0625b0.html(2015年1月16日最終閲覧)、「研究者総覧トップページ>部局一覧ページ>大学院文学研究科 岡橋 秀典」<http://seeds.hiroshima-u.ac.jp/soran/f4f229c/a.html>(2015年1月16日最終閲覧)。
- 3) 岡橋は、こういった海外調査をする時に最も重要なのは、このチャンド氏のようなパートナー、すなわち現地の協力者の存在であると強調する。チャンド氏の存在のおかげで、警戒する村人の説得や、ヒンドゥ

ー語を話せるスタッフ（この場合はクマオーン大学の大学院生）の準備がはじめて可能となったという。

- 4) 一例として、インドの地域調査では、個人を特定するために、まず当人の父親の名前を尋ねるという「鉄則」が紹介された。広島大学地理学研究室では、長年のインド農村の調査にもとづいて、このようなメソッドが豊富に盛り込まれた調査票を作成しているため、これにもとづいておけば「適合度は高く、大間違いはない」という。
- 5) 岡橋秀典「広島大学のインド地誌研究」『地理』52(2)、古今書院、2007年、pp.46-52 参照。このコラムでは、広島大学のインド地誌研究の系譜が時系列的に記述されている。
- 6) 広島大学現代インド研究センターのウェブサイト <http://home.hiroshima-u.ac.jp/hindas/aboutus.html> (2015年1月16日最終閲覧) より引用。
- 7) 本来であればこのような表記の仕方は避けるべきであるが、研究者による学びの過程を可視化するという本稿の趣旨に合わせて、あえて「筆者がどのような目的で参照した文献か」という分類にもとづく形式に整理した。

参考文献

- ＜岡橋論文の理解のために参照した文献＞
- 荒木一視(2001)「経済開発下インド2農村における耐久消費財の普及と村落社会の変貌」『地理学評論』, Ser.A74(6), pp.325-348。
- 岡橋秀典(2009)「躍進するインドの光と影—経済自由化後の動向をめぐって—」『立命館地理学』第21巻, pp.43-57。
- 岡橋秀典(2011)「新興経済大国・インドにおける低開発 地域の変貌—ウッタラーカンド州の事例から」『広島大学大学院文学研究科論集』第71巻, pp.99-110。
- 岡橋秀典(2014)「山岳地域農村における就業

機会の拡大と世帯経済」岡橋秀典編『現代インドにおける地方の発展 ウッタラーカンド州の挑戦』海青社，pp.165-184。

岡橋秀典・番匠谷省吾・田中健作・チャンド，R（2011）「経済成長下のインドにおけるヒマラヤ 山岳農村の変貌—ウッタラカンド州の事例—」『地理科学』vol.66, no.1, pp.1-19。

＜研究者共同体のプロジェクトや研究史を把握するために参照した文献＞

正井泰夫・竹内啓一編（1999）『続・地理学を学ぶ』古今書院。

岡橋秀典（2007）「広島大学のインド地誌研究」『地理』52（2），古今書院，pp.46-52。

岡橋秀典（2014）「日本の地理学におけるインド地域研究の展開—1980年代以降の成果を中心に—」『広島大学現代インド研究—空間と社会』Vol.4, pp.15-27。

著者

大坂 遊 広島大学大学院教育学研究科博士
課程後期

岡橋 秀典 広島大学大学院文学研究科

草原 和博 広島大学大学院教育学研究科